

Title	フランドル地方のベギンホフ：一三世紀の発明： 中世という時代に女性の自立が可能だったのはなぜか
Sub Title	The myth of Flemish beguinages : how independent life for women became possible in the middle ages ?
Author	上條, 敏子(Kamijo, Toshiko)
Publisher	三田史学会
Publication year	2017
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.87, No.1/2 (2017. 7) ,p.139(139)- 163(163)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20170700-0139">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20170700-0139</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# フランドル地方のベギンホフ…一三世紀の発明

——中世という時代に女性の自立が可能だったのはなぜか——

上條 敏子

## I. はじめに

本稿は、フランドル地方のベギンホフ…一三世紀の発明という題目で、中世という時代に女性の自立が可能だったのはなぜかを展望しようとするものである。<sup>(2)</sup>ここでは、いまだこそ近くはなったものの、それでも「あまりに遠い」ベルギー、オランダを訪れたことのない読者にも、ベギンホフとはいかなる外観と特徴をもったものであつてそれがどのような条件下に設置されたかを探究する作業を通じて、ヨーロッパの歴史と歴史のなかのジェンダーの位相についての理解を深め、同時にベギンホフの性格、機能、特質について改めてふりかえることをめざしている。ベギンホフとよばれる閉鎖的空間としての建築群は、ベルギー、オランダに点在しており、うち、

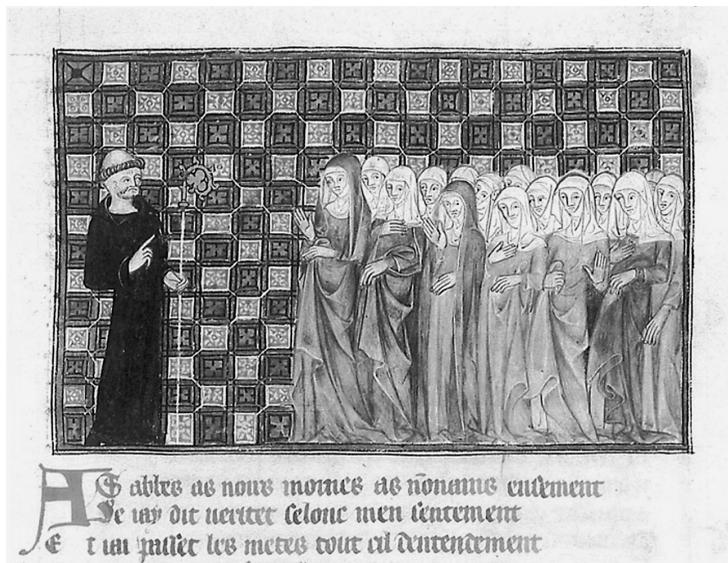
フランドル地方のベギンホフ…一三世紀の発明

一九九八年に一三箇所がユネスコの世界遺産に登録された。ことに、著名なのがブルージュのそれで、ベルギー随一の観光名所として著名であることから訪れたことのある観光客は少なくないであろう。

英語、フランス語ではベギナージュ *Begijnages* 現地語のオランダ語ではベギンホフ *Begijnhof* (複数形 *Begijnhoven*) なるものは、一三世紀までに成立したもので、当時の時代背景としてあつた宗教的な熱狂ともよべる雰囲気のほか、ベギンとしての生は中世都市の女性にとってありふれた選択であつた。

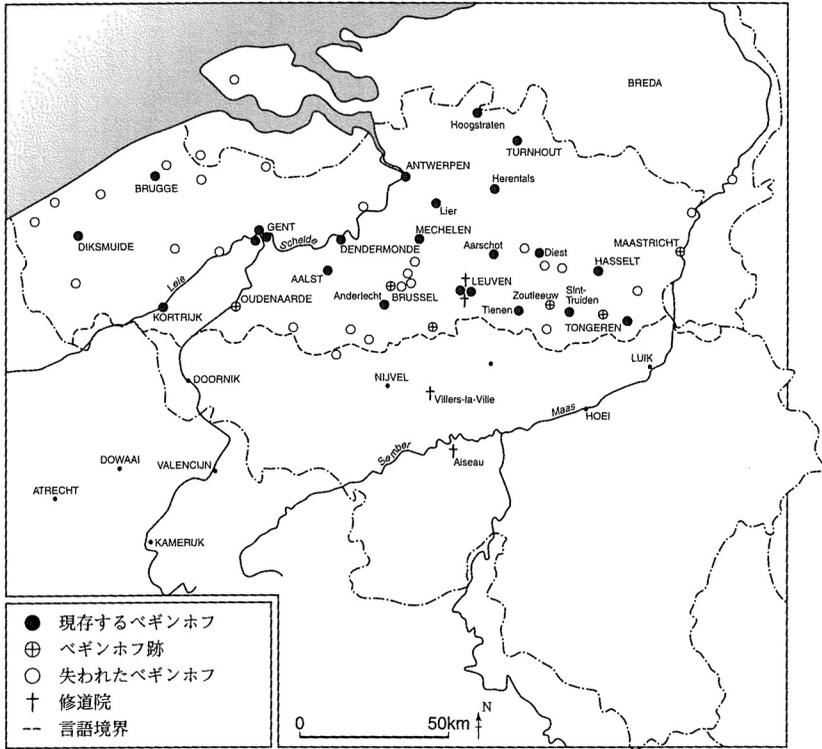
すでに別稿で明らかにしたように<sup>(3)</sup>、彼女たちは元来、市内随所に三々五々、居住していたものが、一三世紀中ごろより、女性に居住を限定した一面に集まり住むようになったことで成立にいたつたものである。この女性専

一三九 (一三九)



図版1 聖職者の言葉に耳をかたむけるベギン

用の居住空間こそがベギンホフとよばれるものにほかならないが、彼女たちについて特筆すべきは、織布産業などの手労働や教育、看護に携わることでも自活を目指した点である。またこのような女性たちが集まり住む区画は、今日のベルギー各地のほとんどの都市に分布していた。かつ、特筆すべきは、ベギンホフとよばれるこの特殊な生活空間がベルギーでは現代まで命脈をたどった点である。しかしなぜいったい、こういった女性たちの集落は、ここまでの長きにわたって、歴史をさざみえたのであるうか。ベギン運動が女性を主体としたことから、ベギンホフ成立と繁栄の背景について多角的検討を加える過程が、ヨーロッパの過去とジェンダーに対する理解を深める機会となる。だがこの問いに踏み込むまえに、日本からはあまりにも遠い国であるベルギーという国とそこに点在するベギンホフがわたくしという異邦人に与えた印象に簡単にふれておきたい。わたくしが、はじめてベルギーにおりたったのは、一九八七年のことになる。ブラッセル市内から大学町のルーヴェンにむかう道筋で目にしたなだらかな緑の丘陵に点々と散らばる、赤みをおびたレンガ造りの家屋の色合いがそれは美しく、なんというおとぎの国のような美しい国にきたものかと感歎し



ベルギーにおけるベギンホフの分布

言語境界の上半分つまり北側は、オランダ語方言のフラマン語が住民の言語であり、南側ではフランス語が住民の言語である。フラマン語を話すフラマン人とワロン人（フランス語を話し、主にベルギーの南半分とブラッセルに居住する）とでは風俗、気質ともに異なるとされる。

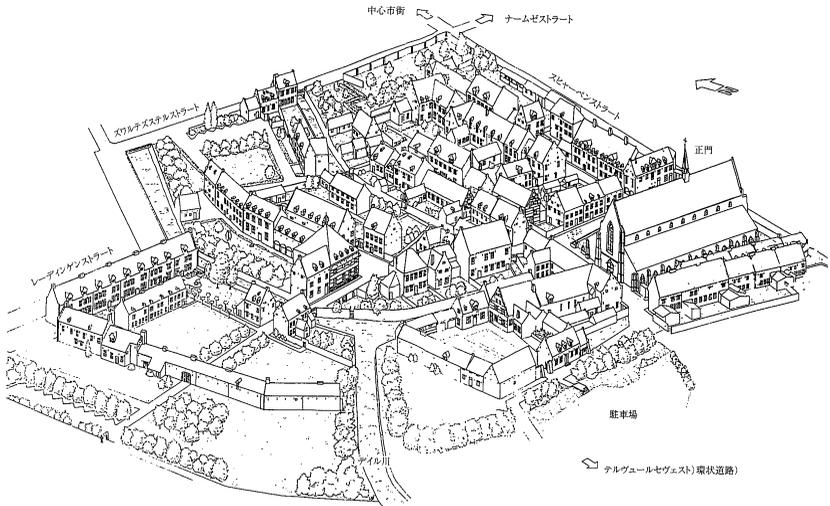
ベルギーのベギンホフは、フラマン語地域に多い。

図版2 ベルギーにおけるベギンホフの分布

たのは昨日のことのよう<sup>(5)</sup>に記憶に新しい。さらにそれから二週間のうちに、わたくしは、ベルギーでも有数の規模と美しさを誇るふたつのベギンホフを訪れることになる。すなわち、ルーヴェンとブルージュのそれである。驚いたのはその広さ。ルーヴェンのそれは、何と敷地面積六ヘクタールにおよぶ。若輩ではあったが、わたくしも中世史家のはしくれとして若干の予備知識はあったものの、ここまでの規模を誇るとは想像だにできなかった。ベルギーのベギンホフが都市のなかの都市とよばれることは、ベルギーに着いてはじめて知ったが、なるほど、その異名にふさわしい景観である。ルーヴェンのフロ



図版3 ブルージュのベギンホフの内庭から居住用家屋を望む



図版4 ルーヴェンのベギンホフ全景 (17世紀の景観をほぼ保つ)

トーベギンホフ（フロート）は、大きいの意味のオランダ語。市内には比較的小規模のベギンホフも存在するため大きい方がこの名前で呼びならわされている<sup>(6)</sup>に足を踏み入れて見れば、敷地内を縦横に街路がはしり、正面入り口から遠い裏側には、緑地がひろがり、緑地をふちどるように木々がうえられている。敷地内を貫通する川まであり、橋の両側に敷地が広がるという威容である<sup>(7)</sup>。しかも道路側の外壁には、一切窓がなく、複数の家屋の壁面がきれめなく連続し全体として閉鎖的空間を形成しているために、外をあるいていても、入口を入らなければ、その存在にも全容にも気づきようがない。こうした閉鎖的空間が、ベルギーの歴史にもたらした意味もさることながら、七五〇年という長きにわたって、その存在を近年までほとんど知られることなく存在してきたこととは驚くべきことではないだろうか。特にその性格に関する理解は、異なる文化圏の人間には理解がおよびにくく、正確にその歴史的意義を理解し説明しうる研究者は、当時の日本には皆無であった。それは、海外からの渡航者が、ベギンホフを訪れることがまったくなかったからというわけではない。それどころかブルージュのベギンホフなどは、すくなくとも半世紀まえから著名な観

光名所として人々を魅了していた。だが、残念なことに、訪れる観光客の大半は、それがいかなる意図をもって建設され、いかなる性格の集落であったかについては、知ることなく、立ち去るのみであり、その性格、それが女性の歴史と文化に果たした意義については、相当程度実情と異なる単純化された理解をしたままで終わっていたのである。

一例をあげよう。わたくしがベギンホフの歴史を研究対象とした一九八〇年代にベギンホフを訪れた高名な日本人歴史家は、「あれはまあ養老院だ」と吹聴していた<sup>(8)</sup>。また、現在でもあのウイキペディアの日本語版は、ベギナージュの項目で、ベギンホフをベギン会という存在しない女子修道会の修道院であると説明している。またさまざまな旅行会社のうつつツアーでもことにブルージュのベギンホフは、かならず組み込まれる場所であるにもかかわらず、ベギンホフとはかかれず、ベギン会修道院として紹介されている。しかし、現地の人々にとって、ベギンホフという独特の制度は、修道会とは異質な、別種の制度として理解されているのであり、ベギンとは何かを説明する際には、彼女たちは、修道女とどこが違うかがまっさきに説明されるのが現地で外国人むけに配

られる観光案内の常なのである。修道会の一種ではなく、修道会と対比的な存在としてベギン制度(会)というものがあるとしており、それが果たした歴史的役割は、固有であるとして理解すべきなのであって、ベギン会という修道会があつて、その傘下にある共同体がベギンホフと呼ばれたわけではない。そもそもベギン会という表現を用いながらベギンホフの固有の役割を理解しようとする事自体その成立基盤、役割、意義の理解にあつて障壁となるといつてよい。修道会・修道女と、ベギン(会)・ベギンは中世以来、教会法上別個の扱いをうけており、ベギンホフは、女子修道院制度を補完しながら女子修道院では果たし得ない役割もはたしつつ、固有の歴史を刻んで今にいたつたものにほかならない。<sup>(10)</sup>この問題は教会史関係者以外にはあまりにも煩瑣で複雑であろうと思うのでここでこの点にあまり立ち入ることは差し控えたいが、あらかじめ簡単に箇条書き程度に修道院とベギンホフの違いを確認しておくことだけはお許し願いたい。ベギンが教会法上は、修道女と別個の扱いを受けた点にはすでにふれたが、その意味で修道女と修道院をしばつていたさまざまな規制からベギンは自由であつた。そしてそれは、中世のある時期にベギンが増加した一因でもあ

つたのである。二点目として、ベギンホフの居住者は、修道女と異なり盛式誓願とよばれる修道女に要求される終生にわたり法的拘束力をもつ誓願をたてないという意味で、服装がどうあれ修道女との対比でいえば、疑似修道女ともいうほかない。<sup>(11)</sup>三点目として、修道女はキリスト教徒の模範でこそあれ異端の刻印をおされる危険から皆無であつたのに対して対してベギンと呼ばれる女性たちは、この用語の使用方法がいまいな基準によるものであつたこともあり異端の烙印をおされた受難の時期をしのびつつ疑いははらすことで存続しえた。

修道院とベギンホフをわけける相違点は、ほかにもあげられるが、今ここで、これ以上相違点を細かくあげていくよりも、もう少し異論の余地のない、物的側面にたしかえてその特徴についていくつかの点を確認し、ベギンホフの性格へと議論をすすめよう。

## II. 今日のベギンホフの景観と

### それがたどつてきた簡単な歴史

ブルージュのベギンホフを訪れる大半の日本人が同意するのは、その景観がそこにたたずむと思わず写真をとりたくなるほど、美しい点ではないだろうか。<sup>(12)</sup>そこに居

住したのがだれで、これほどまでに美しい一面がいかなる企図のもとに設営されたのか、という点に関する理解はおよばず、これはいったいなんだらう、この雰囲気はどこからくるのかと驚くのみで、わからないまま立ち去るにしてもである。一三世紀にさかのぼるこの施設の居住者は、そこに居住する限りは、異性と性的接触や不用意な交際を避けた生活を求められていた。彼女たちはいずれはベギン（より正確に言えば、ベルギーでは個人としてのベギンをあそこにベギンがいるよというような意味で文章をつくる際には、ベギンがいるよ、とはいわず、ベゲインチェ Begijnhe がいるよのように用いるが、文献上この呼び方がでてくることはないという慣例にしたがってここでもベギンの表記で統一する）と総称されるようになるのだが、このベギンという名称は、当初からベギンホフ住民を代表とする敬虔な女性たちの一般的呼称であったわけではない。この敬虔な女性たちは、出現当初は、実際に、さまざまな呼称で呼ばれており、たとえば、一二一六年に、教皇ホノリウス三世が彼女たちを保護下に置いた文書では、ベギンという呼称はもちいられていない。<sup>13</sup> ベギンという呼称の初出は一二〇七年であって、一三世紀を通じて、修道院には入っておらず、

一般の俗人にまじって市内に居住しながら禁欲をまもるある種の女性たちをそう呼ぶことがヨーロッパ全土で一般化するのはやや後のことであった。これと並行して低地地方では、一二三〇年代から七〇年代までにほとんど都市にベギンホフ、つまりベギン専用居住区が建設されるようになる。ベギンホフは、直訳すれば、「ベギンの園」程度の意味であって、そういう意味ではベギンの派生語といえるが、これに値するラテン語としてのベギナギウム *Beguinium* は、史料中にあらわれることはかなりまれで相当程度史料を読み込んでいってもこの用語にあたることはない。<sup>14</sup> であるのに、この用語に匹敵する言葉で翻案と思われる用語が実は日本語にもあり、それは比丘尼御所である。比丘尼がベギンの転訛であることは、各種言語に精通した読者であれば、容易に理解するだろうが、ベギンホフのホフとは、宮廷だとか、中庭だとかの意味を持つ用語であるので、ホフの文字道理の訳語としての、「御所」が、ホフの訳語として選択され、遠く離れた日本で比丘尼御所として出現することになるものと思われる。奇妙であるが、洋の東西の交流は、過去においても、われわれの想像をこえて深かったということなのだろう。<sup>15</sup> さて、このベギンホフの景観であるが、

図版 5 ブルージュのベギンホフの  
鳥瞰図

周囲とくらべてめだって緑の多い一帯がもともとのベギンホフの敷地であり、ガイドブックで愛の湖とよばれている池の部分、正面の門の外側ももともとは、ベギンホフの敷地でありここには施療院などがあった。図で言うと下のほうのしげみの部分にあたる。



図版 6 ブルージュのベギンホフ正  
門付近  
手前の白い部分が正門であり、その  
左手に広がるのが愛の湖である。



図版 7 ディーストのベギンホフ



図版 8 同正門



図版 9 同聖霊ターフェルの家



図版 10 ディーストのベギンホフ



図版 11 同



図版 12 同



図版 13 及び図版 14 コルトレイクのベギンホフ。左は学校



図版 15 及び図版 16 ルーヴェンのフロートベギンホフ



図版 17 及び図版 18 ルーヴェンのフロート=ベギンホフ



図版 19 ディクスマイデのベギンホフ

ヨーロッパのほかの地たとえばドイツのライン河流域で一般的であった単一もしくは、二、三の家屋もしくは、単一の家屋の一部などで構成される建造物に対しても、英語、仏語研究文献ではベギナーージュ（ベギンホフにあたる仏語、英語表現）の呼称をあてることが一般におこなわれている。<sup>(16)</sup> こういった単独家屋形式を主流とする他地域のベギン共同体に対して現ベルギーに残存するベギンホフについて特徴的なことは、それが広々としており、囲壁や水路で外界から遮断されており、独自の礼拝堂と施療院を囲壁内の敷地にそなえていることである。これは、日が暮れてから女性たちが一般地域の教会にかようなことの不都合や、構成員の老後などを考えて設置されたものであった。当時一般市民は、その居住地によって自動的に割り振られるきまった教区教会に通うことが義務であって、教区教会以外の教会に通うことは選ばれた者の特権であったから、思いきったいいかたをすれば、ベギンは、宗教的特権階級であったということもできる。

### Ⅲ. ベギンホフが未婚女性にとつて もつていた意味・守られた空間

ベギンホフの静謐で、独特な雰囲気は低地地方の生ん

ブランドル地方のベギンホフ…一三世紀の発明

だ偉大な画家フェルメールの絵画にも通じるものであって、そこにひきつけられるものを感じ取るのはわたくしだけはないだろう。実際未婚女性にとつて、ベギンホフは理想的な居住空間であった。喧騒をはなれたおだやかな雰囲気があるそこにはただよい、セキユリティチェックも万全で、敷地を外部と隔てる門は夕刻六時をめぐりに閉鎖され翌朝あらためて開かれるきまりであり、男性は、誰一人として夜間敷地内に立ち入ること、とどまることを許されなかった。敷地内礼拝堂に奉仕する司祭の家は、ルーヴェンではベギンホフの近くとはいえ、外部の通りに位置していたくらいで専従司祭であっても、男という意味で信頼されていなかったことになる。<sup>(18)</sup> 司祭といえども女の色香によるめかない保証はないことだろう。兵士や見知らぬものなどのぞましからぬ者の立ち入りも入り口でチェックされていた。<sup>(19)</sup> ここで女性たちは、日々の生活の中で感じる煩わしさや鬱陶しさ、また伴侶や守るひとのない未婚女性を見舞いがちな危険から多かれ少なかれ保護されて自活した生活をいとなんでいたのである。<sup>(20)</sup> 未婚女性にとつて最も深刻な危険であつて人権侵害でもあるものが、性的搾取であることはいうまでもないがそういったものから守られるための方策がとられてい



図版 20 アントウェルペンのベギンホフ

たということが<sup>(21)</sup>できる。

未婚女性がくらすには、好都合な面が何かとある備えをもった制度といつてしかるべきベギンホフであるが、よくもそのような制度が成熟し、歴史のなみをかいくぐってきたものだと思う。では、閉鎖集落型ベギンホフが、広まり歴史にたえて近代以降も存続し、現存するのは、ほぼ今日のベルギーのオランダ語圏即ち言語圏としてのフランドルに限られるのはなぜだろうか。

#### IV. 一三世紀のフランドル地方

ベギンホフ成立の契機についてもっとも一般にいわれるのは、それが、十字軍に参加するために故郷を離れた若く魅力的なそうでなければ良き伴侶ともなりえた男性たちの後に残され、故国にとどまった女性たちの直面する問題を解決するためのものであったという説明である。だが、知られているように、十字軍がはじまったのは一〇九六年であるのに対して、ベギンホフ建設は、一三世紀になってからにすぎないという事実を考えれば、こうした突発的理由だけをもって、ベギンホフ繁栄の説明とは<sup>(22)</sup>しがたい。

集落型ベギンホフ誕生の問題を歴史的に説明するには、したがって、ベギンホフの基礎が築かれた年代と地域が一三世紀中ごろの現ベルギーに集中している点を考慮しながら当時の時代状況、地域の特殊事情などを考察に含めて行く必要がある<sup>(23)</sup>。全般的な地域の状況からみていくと、この地域はローマ時代という比較的早い時期にキリスト教化が進み、キリスト教の下に平和と繁栄を享受した歴史をもつ。この土壌に加えて中世後期ヨーロッパに都市化が進行した一二世紀から一三世紀にかけて、都市

ベルト地帯とでもいふべきものを形成し最も都市化の著しかったのが現在のベルギーにあたる低地地方とイタリアであった。そしてその繁栄をささえた産業の筆頭が織布産業であつて、この産業は現代日本でいえば、車にあたる基幹産業で外貨獲得の筆頭として位置づけられるものであつたのだが、フランドル産の布は、高品質で名高く、ヨーロッパ各地に輸出され流通して<sup>(24)</sup>いた。広大なベギンホフがたちゆくための経済環境としてこの点を見逃すわけにはいかない。この産業のおかげで、この地域では相当数の女性たちが自立をささえる対価を得ることができたことが確実だからである。そしてまた都市経済全体にとつてみても織布産業をささえる労働力を提供していたのが、勤勉に働くベギンたちであり、そういう意味では、若年女子労働力としての性格をもつ女性たちは、経済活動全体を底辺で支えるなくてはならぬ労働主体であつたのである。<sup>(25)</sup>浸透する貨幣経済、勃興する市民層、物価上昇の中で苦境に立たされる中小貴族、変質する騎士層、都市のさらびやかな繁栄が、この時代のこの地域をおおつたためくるめく変化であつた事を覚えておこう。

さらにフランドル地方のベギンホフの外的環境について説明を要する事柄がある。それは老後の施設である施

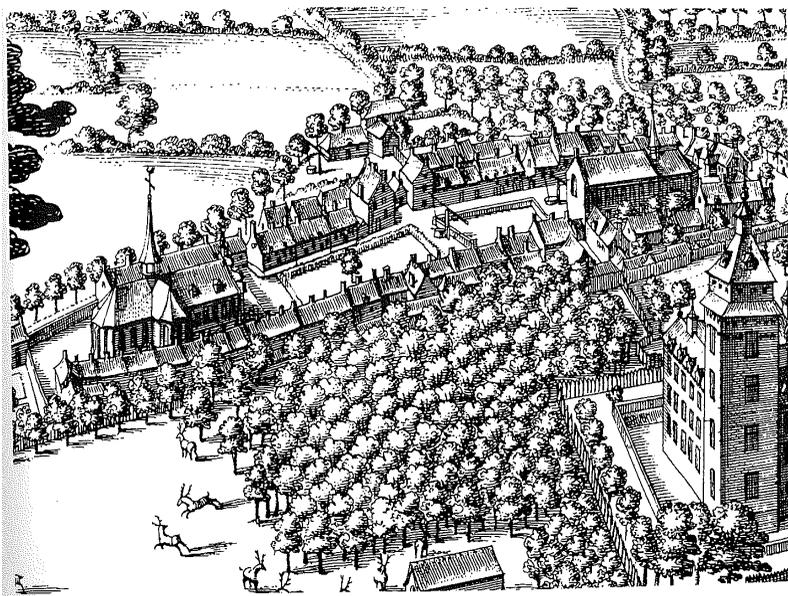
療院まで内包する建築物としてみた場合の複合性である。ベギンと呼ばれる女性の存在自体は、一三世紀にあつては汎ヨーロッパ的現象で、南は、フランス、スイス、東方は、ポーランドにまでその存在を確認できる。だが、もつとも広大なベギンホフが建設された地域といえ、ほぼ今日のベルギー北部のフラマン語<sup>(26)</sup>(オランダ方言)地域即ち広義のフランドルに限定される。この現象を説明する際忘れてはならないのは、マルガレータ、ヨハンナと続いてフランドル女伯の地位にのぼつた二人の女性の存在である。一三世紀のフランドルに君臨したこの二人は、熱心なベギン保護政策をとつていたからである。

実際、フランドル伯領内各地のベギンホフは、二人の女伯の肝いりで建設されたものが相当数みられ、その際、女伯はかなりの規模の寄進、具体的には土地や収入などをベギン共同体に提供することを惜しまず、ベギン保護にまい進して<sup>(27)</sup>いた。伝承によれば、ふたりの女伯は、貴族の子女を含め名譽ある女性たちが、ただただ単に、家庭の事情、相手方の事情などによりふさわしい伴侶を得られず、かといつて、修道院にはいることもできかねて不名譽な生活をしいられ恥をしのんでいることを痛々しく思つていたが、天からのひらめきによって、ベギンホ

フ建設を思いついたという。<sup>(28)</sup>端的にいえば、二人の女伯にとつてベギンホフ建設の動機<sup>(29)</sup>は未婚女性にキリスト教徒として恥じずに生きる道を提供しそれにふさわしい環境を整備することであつて、そのことを為政者が意図的かつ積極的に考えていた点は、他地域にくらべ特筆すべき事情である。地域の為政者が女性であつたことが、女性たちにとつてめぐまれた環境がうまれた背景としてあるということになるのではないか。自身の父親が十字軍にたびだちエルサレムでそのまま死去したことで、男社会の中で辛酸をなめていた女伯が、单身女性の苦勞を身をもって理解し、老後まで見据えて搾取から保護していた可能性が高く、<sup>(30)</sup>そう考えるなかでベギンホフという特殊環境の条件がおのずとさだまつていったということであろう。この女伯であるが、一三一一年、ヴィエンヌ公会議が「ベギンとよばれる女性」についてよからぬ噂があるとの理由で、弾圧を試みた際にも、地域の司教との連携のもと、地域におけるベギンホフ住民の潔白を教皇に説明し説得することに尽力し成功しており、そのことも、この地域でその後の長きにわたつてベギンホフ制度が存続し、名誉ある生活様式としてのベギンの地位が不動のものとなつた遠因となつた。

極論すれば、当時のヨーロッパでも屈指の名門であつたフランドル伯家、わけても、二人の女伯が一三世紀に連続して伯領に君臨したことが今ある形でのベギンホフ制度の確立と維持を実現させたもうひとつの鍵であるということになる。<sup>(31)</sup>

このような宮廷とベギンホフ制度の接点を例証するものとして、城に隣接して設置されたベギンホフを描写した図版を見出すことができたので、確認されたい。<sup>(32)</sup>(図版21)。ベギンホフが城館に併設されていたことが見てとれる。童話のなかに歴史の隠された真実があることは、阿部謹也氏が名著、『ハーメルンの笛吹き男』で示したとおりだが、この図版から強く想起されるのは、『眠り姫』である。眠り姫では、呪いによつて城の一面の閉ざされた空間で一〇〇年の眠りについたプリンセスを、訪れた王子が抱擁ならぬ接吻によつて一〇〇年の眠りからめざめさせる。物語中に登場する、呪いをやらげ死を一〇〇年の眠りにかえた女性にベギンの姿を、そして、結婚相手があらわれるまで一〇〇年の眠りにつく場所を、城に隣接した一角としてのベギンホフに、一〇〇年の眠りについたプリンセスを、厳しい規範意識によつて男性を遠ざけ性的ナイーブさを保つ女性の姿に重ねることが



1670年のトゥルンハウトのベギンホフ 城に隣接して設置されることがわかる

図版 21 トゥルンハウトのベギンホフ

できる。実際に一九八〇年代という立派な現代にあっても、ベギンに依頼することで結婚式の日の天候を左右することができると民間では信じられており、その存在は、呪術的な要素をもつものとして認識されてきたことを忘れてはならない。プリンセスが眠りにおちる瞬間に指をついた糸紡ぎ棒はベギンの労働の象徴でもあり、眠り姫伝説の核として、ベギンホフ制度を考えることはそうまちがっていないだろう



図版 22 ベギンによるレース編み作品

う。<sup>(33)</sup>

もう一点ベギンホフと宮廷文化との接点を例証する素材として、ベギンによる精緻なレース編み作品の写真をかかておく(図版22)。実に精巧にできており高度の技術が世代をこえて受けつがれてきたことがよくわかる。用途・製作技術ともに宮廷とつながっていると考えるのが妥当だろう。写真にみられるのは、ほとんど値段のつかないような芸術に近い作品だからである。

さらに、これも見落されがちな論点であるが、ラテン中世とも呼ばれる時代にあつて、ベギンたちは俗語つまり母語による文学の重要な担い手でもあつた。ダンテ以前の豊かな俗語文学の世界の担い手であつた彼女たちの作品には宮廷文学との共通項が多いが、これについては稿を改めることとし、ここでは宮廷文化とベギンホフ制度の接点の傍証としてこの点を指摘するにとどめたい。

## V・文化的遺産

フランドル地方におけるベギンホフ成功のインパクトは強烈であつたらしく、ベギンホフに範を得た施設の設置は、急速にヨーロッパ各地に広まつた。禁欲とは縁の薄そうなパリにさえ、一三世紀には、「ベギンホフ」が

設置された。しかし、そこにおける生活はフランドル地方のベギンホフのそれとは幾分趣をこにしたものであつたかも知れない。パリのベギンは毛皮の裏つきのコートをおつて勢ぞろいしているのに対してヘントのベギンホフ住民はほんのわずかな持ち物しか所有しておらず、日々の糧をえるべく、忙しく労働にいそしんでいたことが知られるからである。<sup>(34)</sup>しかしこれをもつてフランドル地方のベギンの社会的出自が低かつたとするのは早計である。つつましやかで秩序ただしく、勤勉な生活態度を身につける訓練の意味合いが、祈りと労働の生活にあつたからであつた。おそらく、フランドル地方のベギンホフの成功にうたれて、フランス国王がパリに導入した「ベギンホフ」においてはつつましやかな生活という規範は当初より真似されなかつたか、もしくは急速に忘れ去られたものであろう。

パリとヘントにみる生活態度の相違からは、心のもちかたというものは、未婚女性だけが住むことを許された区画をつくるというような、物的な外観にかかわるものと較べるなら、真似るだとか、輸入するだとかがきわめて困難なものであることがわかる。逆も真なりで伝統は根こそぎにすることも難しかったようである。フランス

革命の際のエピソードはこの事を物語る。フランス革命の際、今日のベルギー一帯は革命防衛軍をなめるフランス兵士に占領されるが、その際全土のベギンホフは修道院と同じく接収され、ベギンは、固有の衣装をまとうことを禁じられた。だが、数年後、政治的状況が変化することをまっていたかのように、各地のベギンホフは、本来の機能と姿をとりもどしたのである。<sup>35</sup>ただし豊富な財源をとりあげられ、教会内部の備品まで競売にかけられたりしたことのダメージは大きく、これを契機に、ベギンホフは、衰退の度合を一拳に速めたのであった。その後もひっそりと存続してきたベギンの生活の伝統であるが、数年前、フランドル地方の伝統的生活を継承してきた最後のベギンが死去してベルギーにおいても、ベギンホフの歴史は幕をおろした。転機は七〇年代だったとも言われているが、現実問題としても今日、ベルギーの若い世代にとってベギンとしての生は魅力ある選択肢として映らない。にもかかわらず、本来の居住者を失った後も、歴史の中でベギンホフが地域に及ぼした影響、教育、慈善の分野で果たしてきた役割は地域住民に語り継がれしつかりと記憶にとどめられていることも忘れてはならない。<sup>36</sup>

フランドル地方のベギンホフ…一三世紀の発明

## VI. おわりに

本稿のおわりに、わたくし自身がアムステルダムへのベギンホフを探訪したときのエピソードを紹介することをお許し願いたい。アムステルダムのベギンホフは、たずねあてるのが少々むずかしく、多少難儀したのだが、ようやくなかに入り、入り口近くの事務所のような建物でなかの女性のまえに立ったときのことである。彼女は、最初怪訝な表情をあからさまにみせ、何のために外国人がやってきたのか、疑問に思い、不安げでさえあった。しかし、ひとたび、わたくしがオランダ語で自己紹介をはじめ、ベルギーの名門ルーヴェン大学に籍をおく学生であって、ベギンホフの歴史に興味をもっているむね説明するや、ぱっと晴れやかな顔になり、しきりと、最近刊行されたばかりというオランダ語で書かれた書物をすすめるのである。つたないオランダ語でどこで買えるかなど、きいたのだが、どんな説明をうけたかではなく、必死でおしえようとしてくれる女性のうれしそうな態度がわたくしには実に印象的であった。

ベギンとしての生をたつとぶこころのありようを英語であるとか日本語であるとかで説明し、論じることは実

は、むずかしい。言語は文化や価値観を内包するものだからである。<sup>(38)</sup>ルーヴェン最後のベギンが晩年インタビューに答えてベギンとしての生を美しいものと答えていたが、この美しいは、オランダ語では、schone (スビューン) なのであり、そこには、清純と清廉さを感じさせる美しさという含意があるので華美でなければいけぬ対象は、その範疇にはいらない。この理解がなければ、ベギンの言葉も何をもって何が美しいのかわからないということがになり、訳語だけをたよりに、ベギンの生のどこが美しいのか理解したり、考察したり、もしくは追体験することはできないことになる。

とはいえ、ここまで、なんとか、日本語を駆使して七五〇年におよぶ歴史を刻んできた自立する女性の共同体の成功と存続の謎にいどんできた。それらを要約するなら、フランドル地方のベギンホフの発展と繁栄にとつて、社会経済的要因が重要であったことに疑問の余地はないが、女性の為政者による女性の視点からの側面支援、さらに地域の人々が、ベギンとしての生およびベギンホフに対して経済的必要以上の価値をおいてきたこともまた事実であり、見逃すことのできない存続要因といえる。

ベギンホフは若年女性を保護しながら、教育訓練の場

を提供してきており、その目標は女性としての尊厳を大切にしながら、称賛に値するいきかたの基礎とするというものであった。また、ベギンの生活スタイルはキリスト教徒としての理想的生き方の具現でもあった。一三世紀に高名な聖職者がのべていたように、「彼女たちは誰の負担にもなっていない。その生活スタイルは天にもつとも近いもので」<sup>(39)</sup>、「慈善活動において、禁域のなかでくらす修道院生活者にまさっている。彼女たちは強欲な俗人のただなかで世俗の流儀にのつとつて生活しており、喧騒のただなかにあつて隠者のごとき」<sup>(40)</sup>と言わしめたものであった。聖職者の華美な生活は、一般民衆の重い負担となり中世南フランスのカタリ派運動やフランス革命の遠因ともなったが、それとは異なり他者に負担をかける生活様式の実践者がベギンであったという事である。加えて一九八〇年代のルーヴェン最後のベギンの死去に際しての地元の新聞の記事にみるように教育、看護の分野におけるその貢献は、地域住民がとくに語りつくところでもあり地域に根ざした活動は万人の認めるところであった。

まとめればベギンホフ成功の秘密は、十字軍のような単一の理由により説明しうるものではない。歴史をこえ

るジェンダーの問題と、一市民、一女性、一キリスト教徒としての生活姿勢に関する伝統と観念といった文化要因もベルギーならではのベギンホフ生成と繁栄、長きにわたる制度の維持の基礎にあつたといえる。以上、現地調査にもとづき、住民感情と当事者の間で伝えられてきた伝承に注意を払いながらベギンホフの性格、機能、特質について改めてふりかえった。そこから見えてきたのは、ベギンホフが教育訓練の場でもあり、未婚女性を性的搾取から保護していたという側面であつた。このような世界が、『ばら物語』のような文学作品またクリスチヌ・ド・ピサンの『女の都』とどう接合していたか、あるいはいないのかは、今後の研究課題として残されている。

#### 註

- (1) 本稿は、二〇二二年七月三二日にベルギー大使館にて、日本ベルギー学会 (BIAS) の集まりで英語報告を本人自ら逐次通訳しながらパワーポイントをもちいて同名のタイトルで発表したものをベースとして作成したものである。発表の機会をもうけてくださった関係者一同にこの場をかりて心より感謝したい。
- (2) 今日のベルギーにおけるベギンホフの分布状況については上條敏子『ベギン運動の展開とベギンホフの形成』(刀水書房、二〇〇一) 一〇三頁。ベギンの経済活動及び社会的貢献については、上條敏子「中世における女性の経済活動と社会的貢献に関する覚書」『史学』七九卷(二〇一〇) 四〇一—四一九頁。

ては上條敏子『ベギン運動の展開とベギンホフの形成』(刀水書房、二〇〇一) 一〇三頁。ベギンの経済活動及び社会的貢献については、上條敏子「中世における女性の経済活動と社会的貢献に関する覚書」『史学』七九卷(二〇一〇) 四〇一—四一九頁。

- (3) 上條敏子「单身女性の住まい方——中世北西ヨーロッパにおけるベギンの居住及び組織形態」赤阪俊一、柳谷慶子編著『ジェンダー史叢書第八巻生活と福祉』(明石書店、二〇一〇年) 一九三—二一九頁。

- (4) 上條敏子「单身女性の住まい方」ことに二〇〇—二〇四頁、二二七—二二〇頁。清貧は、一三世紀のヨーロッパにあつては、幅広く観察される宗教的モチーフで初期のベギンはこの理念の影響をうけていたとされる。上條敏子『ベギン運動の展開とベギンホフの形成』二〇一—二二頁、同「单身女性の住まい方」一九七—二〇四頁。

- (5) ルーヴェンのフロート＝ベギンホフ (オランダ語表記 Groot Begijnhof) Olyslager, W. A., *Het Groot Begijnhof van Leuven*, Leuven, 1978. 上條敏子「ベギン運動の展開とベギンホフの形成——单身女性の西欧中世」特に一〇七—二〇二頁、二二〇頁、二八八—二九二頁、二九四—二九五頁、三〇一—三〇三頁。

- (6) ベギンホフは、ルーヴェンでは二つ存在しおきいほうが、Groot Begijnhof ちいさいほうが Klein Begijnhof。歴史的には、小さい方のベギンホフのほうが起源が古いともいわれ市内中心部近くにあり、大きい方は、中世の市壁をでたすぐのところ存在する。ちいさいほうのベ

ギンホフの存在はあまり知られておらず、単にルーヴェンでベギンホフといえは、Groot Begijnhofをす。

(7) フロートIIベギンホフの平面図は、上條敏子『ベギン運動の展開とベギンホフの形成』、一三三頁。

(8) 上條敏子『ベギン運動の理解における聖俗二分法の限界』『橋論叢』一一一巻(一九八四)一三三―一五一頁。特に三四三―三四四頁。Philipp, L. J. M., *De Begijnhoven*, 1918, p. 157, pp. 169-171, Philipp, L. J. M., *Het Outstaan der Begijnhoven*, 1943, p. 49.

(9) 日本人研究者がベギンホフを養老院と誤認した理由は明らかである。少なくとも一七世紀には、また伝承を信じるなら中世より、フランドル地方のベギンホフは、中上流階級にとって性的に無垢な格好のお嫁さん候補の集団として機能しており、そのために見知らぬ外国人男性からの質問に対して、住んでいるのは年寄りばかりでしてという説明がなされてきたと推定される。現状で若い女性の居住地である限りはそのような説明が安全策として必要であることは自明である。ベルギーにおいてベギンの生活の伝統がほとんどの地域で終焉をむかえたのは、二〇世紀の本当のおわりから二一世紀にかけてからにすぎないことを念頭におかれたい。逆に若い女性が、ベギンホフに興味があるのだけれど、と申し出た場合には、ベギンホフ関係者には大歓迎され、逆に、大学教授クラスの年配の男性識者からは、ベギンになった場合には、法律による規定はないけれども、途中でやめた場合といったも、社会的制裁があるので、よくよく注意したほうがいいよ、だとか、経験はあるのだとか、さっとされ質問されることになる。これが、一九八〇年代の現実であった。当時わたくしはすでに大学院生であったが、写真(刀水書房から刊行された書籍のカヴァーの内側に添付)をみると中学生くらいにしかみえない、といわれており、そのような前提あってこそその質問であった。

(10) 修道女とベギンを隔てる主要な相違は、修道誓願の種類と有無にある。修道女になるためには、教会法上盛式誓願とよばれる終生拘束力をもつ誓願をたてることになっており、そこには、清貧、純潔、従順の三つの要件がはいっていた。これに対して、ベギンは、純潔を守ることのみを求められており、誓願は、ベギンホフに居住する限りにおいて拘束力をもつとされていた。また、修道女の場合には、宗教改革期のトリエント公会議による改革以前には、女性の場合嚴重な修道禁域を守ることを求められたため、活動の範囲はかなりの程度限定されたが、この制約をベギンはうけていない。

(11) 女子修道院のあり方とベギン運動の生成に関しては、上條敏子『ベギン運動の展開とベギンホフの形成』、一一頁、二二―三三頁、一三三―一七四頁、三四頁。B. L. Venarde, *Women's monasticism and medieval Society: nunneries 890-1315*, New York 1997, 一三世紀を包んだ宗教的熱狂とベギンの出現にかんしては、上條前掲書三二―三四頁。Hugens, *Lettres de Jacques de Vitry*, 1960, p. 74 no. 1. の史料の日本語訳は、上條敏子『ベギン運動の展開とベギンホフの形成』、二九四頁。

(12) 現在ブルージュのベギンホフに隣接する愛の湖公園 Minnewater は、息をのむ程の美しのだが、ここは、中世にはベギンホフの敷地の一部でこの湖の対岸にベギンホフの施療院が置かれていた。

(13) Hygens, *Letres de Jacques de Vitry*, 1960., p. 74 no. 1. この史料の日本語訳は上條敏子『ベギン運動の展開とベギンホフの形成』、一九四頁。

(14) 中世の文書史料の史料中におけるベギン共同体の表記については、上條敏子「單身女性の住まい方」で分析した。

(15) 比丘尼御所に関しては、荒川玲子「最慶寺の沿革——尼五山研究の一齣——」『書陵部紀要』二八号、一九七七年、湯之上隆「足利氏の女性たちと比丘尼御所」・遠江国浅羽荘と比丘尼御所（同著「日本中世の政治権力と仏教」思文閣出版、二〇〇一年、中井真孝「崇光院流と入江殿」『日本宗教社会史論叢』図書刊行会、一九八二年）、加藤知恵子「室町時代比丘尼御所入室と室町殿免許について——伏見宮家姫宮と入室尼寺をめぐって」『史学』七三（二〇〇五年）三七—三九六頁、大石雅章「比丘尼御所と室町幕府——尼五山通玄寺を中心にして」『日本史研究』三三五（一九九〇年）、一一—二八頁、再録『日本女性史論集五女性と宗教』（吉川弘文館、一九九八年）、同『日本中世社会と寺院』（清文堂出版、二〇〇四年）、菅原正子「中世後期の比丘尼御所・大慈院の生活と経営」『学習院女子大学紀要』六号（二〇〇四年）三七—五四頁、パトリシア・フィスター「比丘尼御所文化とお伽草子——

二人の近世皇女の信仰と文化活動」『江戸の人と身分四』（吉川弘文館、二〇一〇年）、伊藤慎吾著「比丘尼御所文化とお伽草子——恋塚物語をめぐって」（徳田和夫編『お伽草子百花繚乱』笠間書店、二〇〇八年）、横原雅治「南朝系比丘尼御所保安寺について——世良親王の遺領に関する一考察」、木原弘美「天王寺妙嚴院比丘尼御所——中世大阪の寺院史についての試み」『史窓』第五八巻（二〇〇一年）二二—二四頁、岡佳子「近世の比丘尼御所（上）宝鏡寺を中心た」『仏教史学研究』四二（二〇〇〇年）三〇—六〇頁、同「近世の比丘尼御所（下）宝鏡寺を中心た」『仏教史研究』四四（二〇〇二年）一—四〇頁。日本語の比丘尼御所の字義通りの訳語は英語にするなら Court of women religious in Buddhism くらいであるろう。一般的に比丘尼御所は將軍家、撰閑家の女性を受け入れていた。

(16) ライン流域都市のベギンについての代表的文献には Philips, D., *Begines in medieval Strasbourg. A study of the Social Aspect of Begines Life*, 1941; Asem, J., *Die Beginen in Köln*, : 111 (1927), pp. 81-180; 112 (1928), pp. 71-148; 113 (1928), pp. 13-96. 上條「單身女性の住まい方」がある。スイスにおけるベギンの居住組織形態については Wils, A., *Beginen im Bodengraben*, 1994, pp. 45-141 が参考になる。

(17) ベギンが教会に通うことで生じる不都合については、『ベギン運動の展開とベギンホフの形成』一〇五頁及び註11を参照のこと。ベギンが教会に通う時間帯については

- 同二九八頁の史料を参照のこと。また「単身女性の住まい方」二二二頁。
- (18) ルーヴェンのズキンホフ司祭の住まいは、ズキンホフの隣をはじめ通りであった。
- (19) Oylslager, W. A., *Het Groot Begijnhof van Leuven*, 1978, pp. 55-56, ズキンホフ内の生活全般については、上條敏子『ズキン運動の展開とズキンホフの形成』二二三―二〇一頁。
- (20) ズキンに対する大学生からのハラスメントについては Oylslager, W. A., *The Groot Begijnhof of Leuven*, n.d., p. 118.
- (21) 女性労働者に対する前近代、近代の日本における性的搾取とそれに対する女性たちの方策に関しては、上條敏子「単身女性の住まい方」二二九頁、注(26)。西欧ではペールをつけた女性に対する性犯罪は一般女性に対する性犯罪に較べ二倍の重さをも厳しく罰せられてもいた。例えば九世紀のマルフレット王の法。McCarthy, C., ed. *Love, Sex and Marriage in the Middle Ages A Source Book*, 2004, p. 101.
- (22) ズキンホフの男性版であるベカルドに関する基本的著作は、*Les Beguines and Beghards in Medieval Culture: with special emphasis on Belgian Scene*, 1954. ほかにも重要文献として、Grewen, J., *Die Anfänge der Beginen. Ein Beitrag zur Geschichte und der Ordenswesens in Hochmittelalters*, Münster, 1912.; Ninal, H., *Les beguinages, Origins, development, organisation intérieure*, influence, *Annales de la Societe archéologique de l'arrondissement de Nivelles IX*, Nivelles, 1908.; Philippen, L. J. M., *Begijnhoven: Oorsprong, Geschiedenis, Inrichting, Antwerpen*, 1918.; Mens, A., *Oorsprong de betekenis van de nederlandsche Beginen en Begijnbeweging*, Bruxelles/Antwerpen, 1947.; Grundmann, H., *Religiöse Bewegungen im Mittelalter*, Darmstadt, 1961.; Grundmann, H., *Zur Geschichte der Beginen im 13. Jahrhundert*, *Archiv für Kulturgeschichte*, Bnd 21, Leipzig, Berlin, 1931.; Freed, J. B., *Urban Development and the "Cura Monialium" in the Thirteenth Century Germany*, *Victor* 3 (1972); Stein, F. M., *The Religious Women of Cologne: 1120-1320*, *Ann Arbor*, 1977.; Simons, W., *Cities of Ladies: Beguine Communities in the Medieval Low Countries*, 200.; 上條敏子『ズキン運動の展開とズキンホフの形成』(刀水書房、二〇〇一年); 同「単身女性の住まい方」『ジェンダー史叢書第八巻生活と福祉』(明石書店、二〇一〇年)一九三―二三〇頁。上條敏子「ズキンホフ」『図説ブルギー美術と歴史の旅』(二〇一五年)三五―三六頁、池上俊一『ヨーロッパ中世の宗教運動』(名古屋大学出版会、二〇〇七年)。
- (23) 中世低地地方におけるズキンホフの設立年代については、Simons, W., *Cities of Ladies: Beguine Communities in the Medieval Low Countries*, 2001, p. 49 Table 1. 表にみられるように、二二七〇年までに、七七箇所が設立された。
- (24) Ennen, E., *The medieval town*, tr. N. Fryde, New York, 1979, pp. 153-156, Döllinger, P., *Relations directs entre*

*Strasbourg et les villes hansatiques, 1275, pp. 160-161*, 上條敏子『ヘギン運動の展開とヘギンホフの形成』二六八頁、Simons W., *City of Ladies*, p. 4. 一三五六年から一三五八年当時アルプス以北のヨーロッパにおいてフランドル都市ヘントはパリについて二番目の規模をほこっており、ブルーージュがそれについて四六、〇〇〇人（一三三八—一三四〇）ではほぼロンドンと並ぶ規模であった。ほかのフランドル都市としては、アラス、リール、ドゥエ、サントメール、トゥルネ、イープル、ヴァレンシエンヌ、モンスが人口規模二〇、〇〇〇から四〇、〇〇〇。ほかに、アントウエルペンの人口が一四三七年時点で一五、〇〇〇人であり同市人口は、一四三七年までに五五、〇〇〇人規模、一五二六年には、一〇〇、〇〇〇人規模に成長した。ほかの低地地方の主要都市には、ルーヴェン、スヘルト、ヘンボス、メヘレン、リエージュがあった。Simons, W., op. cit., *ibid.* 都市としての中世ヨーロッパのそれは全体的に比較的小規模であったが、この点については以下の文献で指摘してある。上條敏子『ヘギン運動の理解における聖俗二分法の限界』『一橋論叢』一一一（一九九四）一三三—一五一頁。この地域の特性については、上條敏子「書評 Walter Simons, *Cities of Ladies, Bagnine Communities in the Medieval Low Countries 1200-1555*, University of Pennsylvania Press, 2001.」『藤女子大学キリスト教文化研究所紀要』六号（二〇〇五年）五三—五七頁。特に五四、五六頁でも触れた。

(25) Simons, W., *Cities of Ladies*, 上條敏子「中世における

フランドル地方のヘギンホフ：一三世紀の発明

女性の経済活動および社会的貢献に関する覚書——北西ヨーロッパのヘギンを中心に——」『史学』七九巻（二〇一〇年）六一—七九頁。殊に六一—六七頁。

(26) シモンズは中世低地地方南部における特徴として、多重言語地域、高度な都市化、男性の間ばかりでなく女性の間でも識字率が高かったことの三点を指摘している。Simons, W., *Cities of Ladies*, pp. 1-7. また同地域の結婚事情については、以下のように述べている。「この地域における家族形態は、北部ヨーロッパ型でないしは、北西ヨーロッパ型とよばれる形態をもっており、多少の例外を除けば一夫一婦の夫婦として形成されるが、夫婦ともに初婚年齢が比較的高くまた夫婦間の年齢差が大きい。初婚年齢はおおよそ二五歳程度であったが、それは、家族から経済的に独立して所帯をもてるようになってから結婚するのが通常であったからである。Id. op. cit., p. 7. 詳細に Martha C. Howell, *Women, Production, and Patriarchy in Late Medieval Cities* (Chicago, 1986); and idem, *The Marriage Exchange*. Greilsammer, *Leveurs du tableau: Marriage et maternité en Flanders medieval*, (Paris 1990); Eric Bousnar, "Du marche aux bordiaux. Hommes, femmes et rapports de sexe (gender) dans les villes des Pays-Bas au bas moyen age. Etat de nos connaissances et perspectives de recherche" in Myriam Carlier et al., eds., *Hart en marge in de laat-middeleeuwse stedelijke maatschappij* (Louvain and Apeldoorn, 1997), pp. 51-70. ）、した結婚形態が採用されてきたことは、ある程度の年齢ま

一六一（一六一）

でを女性たちが何の疑問もなくベギンホフです(した)ことと関連があるとみられる。

- (27) 研究者は、フランドル地方のベギンホフ形成に果たしたドミニコ会の役割を強調しがちだがヘントのベギンホフの言い伝えによれば、連続して、女伯としてフランドルに君臨した二人が、単身女性のおかれた苦境をみてベギンホフ形成を思いたったとされる。またルーヴェンのベギンホフ建設に関しては、ドミニコ会ではなく、シトー会が関与していた。この点については、上條敏子『ベギン運動の展開とベギンホフの形成』、一三三―一三四頁。
- (28) Béhune, J., *Cartulaire de Sainte-Élisabeth à Gand*, 1883, pp. 74ff. の史料の日本語訳は上條敏子『ベギン運動の展開とベギンホフの形成』二九六―二九七頁。
- (29) 一般的に、ベギンホフ内の不動産賃賃価格は低廉で、追放などない場合には終生すむことができた。さらにベギンホフ居住者には、各種の免税特権なども適用されていた。またある時期までツンフト規制からも自由であった。Stelens, A., *De social-economische betekenis der begijnhoven, Steden en Landschappen* 7 (1931), pp. 27-33; 上條敏子「中世における女性の経済活動および社会的貢献に関する覚書——北西ヨーロッパのベギンを中心にして」『史学』七九(二〇一〇)、四〇一―四一九頁、特に六三―六六頁。教皇による保護、キリスト教の祭りなど特定の期日に自身の選んだ礼拝堂でミサにあずかる権利をもっていた点については、『ベギン運動の展開とベギンホフの形成』、六三―六四頁。
- (30) 波乱に満ちた二人の生涯については、もしあたりDavid Nicholas, *Medieval Flanders, 1392*, pp. 151-157. とりわけヨハンナは偽ボートワンの事件などの災厄に見舞われた。
- (31) 低地地方以外のヨーロッパ地域では東ドイツの司教などの高位聖職者が一三世紀の宗教運動に敵対的であったことが知られる。Grundmann, H., *Religiöse Bewegungen im Mittelalter*, Darmstadt, 1961, pp. 324-336. また当然ながら伯家などによる保護を強調する説明の対極には、教皇による口頭認可や特権付与による影響を強調する説明がありうるが、この問題については別稿に譲る。
- (32) 城に隣接するベギンホフについては、上條敏子『ベギン運動の展開とベギンホフの形成』二三四頁。これまでの研究では、ベギンホフと宮廷文化の接点について指摘されていない。これは、ビュッヒャーがベギン館を貧民のためのものと位置づけたために、ベギンの社会的出目が下層と想定されていた古い時代の文献の影響による。こうした見方に幾分対抗する見解を提示したのがグレーヴェン、グルントマンであり、出自に関して近年ではシモンズが、多岐にわたっており、下層民は、その一部にすぎなかったことを立証した。
- (33) ベギンホフ誕生以前のヨーロッパには穩修女(*inclosure*)の制度があり、貴族家門の女性を受け入れたのだが、その奉獻の儀式は葬式を模したもので、文書史料中にも奉獻する事を葬るという文言で表現し、以後世俗的には死んだものとして扱われた。
- (34) ヘントのベギンホフ内の生活ぶりについては、Be-

thune op. cit. *ibid.*: 上條敏子『ベギン運動の展開とベギンホフの形成』二九五—二九六頁。パリのベギンが富裕であったのは、国王周辺とのつながりの強さに加えて、パリのベギンが多く絹織物業に携ったことともかかわっていた。

(35) 上條敏子『ベギン運動の展開とベギンホフの形成』二〇三—二二六頁。

(36) 上條敏子『ベギン運動の展開とベギンホフの形成』三—五頁。ルーヴェン最後のベギンの死去を伝える新聞記事『De laatste beginjje in Leuven overleden』の日本語訳は、上條敏子『ベギン運動の展開とベギンホフの形成』二九一—二九二頁。

(37) ベギンの宗教的生の核をなす象徴的表現が、キリストの妻であり、そのことを目にみえる形で具現化していたのは、教会で花嫁を象徴するヴェールをなすかるーニシエーションの儀礼である。

(38) あるフランドル地方の研究者は、清貧を、「自身の世俗的財産に対する執着のなさであり、そういうわけで、使徒的清貧は、若干の留保はつくものの生活の実相というより、*hijzige*のもちかたである」と述べている。Simons, W., *Cities of Ladies*, p. 14. フランドル地方の女性の美質として用いられる観念に“*schon*”（いわゆる美しさに清麗さをおねそなえた美質で花にたとえればすずらんの美し<sup>39</sup>）のほかには“*stout*”（安定感があり堅牢）がある。このように単語ひとつの意味内容をとっても、異なる言語においては、そのニュアンスであるとか、意味の範囲

がことなるため翻訳文献だけで異文化を理解するのは、短絡的理解や誤解をまねがれがたい。

(39) R・W・サザーン著、上條敏子訳『西欧中世の社会と教会——教会史から中世を読む』三三〇頁。

(40) *Tacet enim huiusmodi mulieres, quales in dyocesi Leodiensi plurimas esse nimumus, in habitu seculari secularibus cohabitant, Iulis tamen claustribus caritate superior sunt: inter luxuriosos celibes, in medio turarum vitam ducunt heremiticam* 引用は McDonell, E. W., op. cit., p. 529. 49。

(41) 上條敏子「单身女性の住まい方——中世北西ヨーロッパにおけるベギンの居住及び組織形態」

(42) 中世におけるキリスト教徒としての理想的生活をめぐる観念の推移については Southern, R. W., *Western Church and Society in the Middle Ages*, 1970, ch. 6 and ch. 7 (邦訳 R・W・サザーン『西欧中世の社会と教会——教会史から西欧中世を読む』八坂書房、二〇〇七年)、二四—三二四—三四頁、特に四一—四一—四四頁。